

哲学教育における学習成果とは何か —哲学分野におけるチューニングの可能性—

田中 一孝（京都大学 特定助教）

最後に私の発表に移らせていただきたいと思います。

私のテーマは、「哲学教育における学習成果とは何か」ですが、副題として「哲学分野におけるチューニングの可能性」とつけさせていただきました。

発表の意図としてこれこそが哲学教育の学習成果・アウトカムであると申し上げるつもりは全くありません。むしろ哲学教育の学習成果をどのように定めるべきか、そして、どうやって哲学教育の学習成果として社会に伝えていくべきかということに焦点を当てています。

まずは、簡単に自己紹介をさせていただきます。先ほど少し申し上げましたが、私の専門は西洋古代哲学史であり、主にプラトンを研究対象としてきました。プラトンの研究は、ギリシャ語のテキストの注釈などを参照しながら文献学的に厳密に読み、解釈するという形で行われます。こういった研究をしておりますと、友人やいろんな方々からあなたの研究が何の役に立つのと言われます。哲学を専門としている仲間からさえも、「古代をやる必要はあるの」と言われます。例えば現代哲学を研究している人からすれば、どうしてわざわざ古代に帰る必要があるのかとなるのです。したがって私は、哲学を研究している仲間に対しても自己弁明しなければならない状況でずっと生きてきました。ただ、現在所属している高等教育研究開発推進センターに勤務してからは逆の現象が起きまして、ただプラトンをやっている、古代哲学をやっている、古典学をやっているというだけで尊敬してもらえるんですね。自分の専門を紹介するときは自動的に自己防衛体制に入る癖がついていましたが、このようなことは私の人生で初めてのことでした。

私はずっとプラトンを研究してきまして、センターに所属する前は様々なところで非常勤講師をしておりました。そのうちの一つとしてある体育系の大学で教えておりましたが、そこでは私にとって転機となるような教育の経験をしました。みなさんも想像できるかと思いますが、体育大学には勉強が苦手な生徒がいます。もちろん例外的ではありますが、それこそ初歩的な英文法がよくわかっていない生徒もいました。でもそういった子たちにも教えなければいけない。

そういったときに、私のバックボーンである西洋古代哲学の研究とか、あるいはそれを通じ

て身につけてきたものは、学生にとってどのような意味があるのかと考えます。たしかに学生を目の前にするときにはがむしゃらでしたが、その都度振り返り、やはり哲学の勉強の経験があったからこそ、少しでも有意義な教育に携わることができたと感じておりました。

現在のセンターに所属してからは、FD、アクティブ・ラーニング、評価など高等教育分野において最先端の研究をしている先生方と一緒に仕事をしております。また、様々な機会を通じて高等教育あるいは大学教育における様々な教育実践事例を知ることとなりました。

哲学という私のバックボーンと、高等教育における様々な知見、その両方を生かした形で自分にはできることがあるのではないかと考え、渡邊さんとともに今回の企画をしたという次第です。

さて、本発表の背景に移りたいと思います。

今さら繰り返す必要はないかもしれませんが、私の発表の端緒として学士課程答申に言及する必要はあります。

学士課程答申はいわゆる学士力というものをうたっておりますが、それは高等教育機関が育てべき自立した社会人に必要な能力と言い換えられます。具体的には知識・理解、汎用的技能、態度・志向性、統合的な学習経験という形で細分化されて論じられておりますが、こういったものを我々は育成しなければいけない。

これらの能力は、「各専門分野を通じて培う」と学士課程答申の中では書かれております。基本的には多くの大学は、学部学科を備えており、そういった各組織において専門的な教育を行っております。対して学士力はそういった専門細分化した学問に特化した成果ではなく、どの専門にも通底し、それを学んだ学生は必ず身につけるべき能力です。

もちろん学士力を謳うだけでは学部学科において行われている大学教育の実情に沿ってはいまませんので、文部科学省の要請を受ける形で、日本学術会議が「大学教育における分野別質保証の在り方について」という回答文書にあるように、分野別の学問の定義や学習成果、評価方法など様々な課題に取り組んでいます。つまり一方で大学は、各分野を横断する能力を育てなければならず、他方で各分野固有のパースペクティブから——これは学士力の理念と排他的ではありませんが——どういった学生を育てて、どういった能力を持つ必要があるのかを定めなければなりません。そうした観点から各学科はカリキュラムを編成すべきであり、そのための指針として参照基準をつくらう、そういう問題意識から始まったものです。言い換えれば学士力の議論を補う形で、専門分野から学習目標を定めようとしているのです。

これには英国に先行事例がございまして、Subject Benchmark Statementというものがモデ

ルになっております。既にこの分野別参照基準については、それぞれ分野ごとに参照基準が公開されています。ただ哲学はまだ学会のホームページには載っていません。

(河野：最終段階なのです。)

そうですか。日本哲学会では参照基準の案が公開されていますし、本日の会でも、参考資料として添付されております。公開された参照基準（案）を見る限り、特に人文社会系に顕著ですが、Subject Benchmark Statementに単に倣うだけではなく、一から入念に検討しているように思います。哲学の場合ですと、哲学はどういった教育をしなければならなくて、哲学を学んだ学生がどういった学生になるべきかを根本から考え直す取り組みになっています。

私の関心は、そういった哲学分野の学生の知識、技能、能力、態度をどうすればより社会に効果的に伝えることができるのか、という点にあります。分野別参照基準という先行事例ありますが、どうすればより広い形で、大学の哲学教育の専門家のみならず少しでも多くのステークホルダーを巻き込んだ形で、哲学の教育の意義を伝えることができるのか。それも教育制度・政策に単に乗っかるのではなく、深堀先生のお言葉を借りれば、どうすれば我々が「ギルド的に」哲学教育の意義を打ち出せるのか。そういったことを考えた際に着目したのが、チューニングプロジェクトというものです。

これを知ったきっかけは、最初の趣旨説明で申し上げたとおり、我々のセンターが企画したチューニングについてのシンポジウムです。そこでは、マッキナーニ先生が米国の歴史学分野におけるチューニングの事例を紹介されました。

米国でも当然、人文社会系学問は常にその存在意義を問われ様々な議論がございますが、マッキナーニ先生は、チューニングに取り組むことで歴史学教育の意義を社会的に広めたという御実績を持っていらっしゃいます。私はマッキナーニ先生の講演をお聞きし、このようなことが人文学分野でもできるのかという衝撃を受けました。同時に、これは日本の文脈でも、そして哲学分野でもできるのではないかと思ったのです。

チューニングプロジェクトについて確認しますと、これは、もともとはボローニャ・プロセスというものに端を発しております。ボローニャ・プロセスは、欧州47か国——始まった当初は27か国ですが——そういった国々が共同して教育改革をしようというボローニャ宣言に始まります。教育改革の内容は、例えば、大学相互の単位互換制度や、国家間で比較可能な学位制度、あるいは学部、修士、博士の3サイクル制の整備などがあげられます。ボローニャ・プロセスはそうした教育改革を押し進めて、欧州全体で高等教育圏というものを作ることを目的と

した政策誘導的なプロジェクトです。

これに対してチューニングプロジェクトは、大学教員が主体的に大学の教育、あるいは各分野の教育の意義などを定め、社会的に広めようという「ギルド的に」始まった教育改革のプロセスです。専門分野ごとに協力して、大学を超えて共有すべき分野別の共通規範を定めていったのです。

チューニングは国家から押しつけられた教育改革について異議申立てとしての側面がありましたが、最終的にはボローニャ・プロセスの実質化に寄与しました。この立ち上げに尽力されたゴンサレス先生とワーヘナル先生によれば、関連する全ての国とおもだった組織からの全面的な承認を得るに至ったそうです。欧州に端を発したチューニングプロジェクトは今では地域単位、国単位で世界中に広がっています。その理由の一つに、チューニングの理念として、大学教育の改善は規範の押し付けではなくそれぞれの文脈に沿った形で緩やかな形で進められるべきだと考えられていることがあります。各地域はローカライズしながらチューニングを進めているのです。もちろん我が国でも実施されており、国立教育政策研究所が全国的なチューニングの情報拠点となっております。

チューニングの目的と方法はどのようなものかと言いますと、まず学習成果を分野別に定義しなければいけません。学習成果とは、学生がある特定の学習を終了した時点で身に付けるべき知識や技能、態度を総称します。ある特定の学習というのは、半期の授業でもよいですし、単位や学位サイクルにおける学習と言ってもよい。例えばある大学の学部を卒業したらどういったことを学べるのか、この授業を履修したら何ができるようになるのか、そういった疑問に対応するかたちで学習成果は定められます。

関連する重要な概念として、コンピテンスというものがございませぬ。コンピテンス概念自体が多く議論的になっておりますが、少なくとも次のように言えます。すなわちコンピテンスとは、学位プログラムに即した学習成果を積み重ねることで、学生が総合的に身に付けているもの、その学生は何ができるのかを示すものです。学生はどのようなコンピテンスを身につけるべきか、そのためにはどのような学習成果を積み重ねるべきか、こういったことを明確化しても、大学での実際の教育が対応していなければ意味がありません。したがって、コンピテンスや学習成果を明らかにすることは学位プログラムの体系的な整備にもつながります。

このチューニングのプロセスは図のようなものになっております。まずは、学習成果を定めることが重要です。そして、卒業後の学生のキャリアパスを明らかにする。次にステークホルダーを同定した上で彼らと協議する。ステークホルダーというのは、大学教員や学生、保護者、

雇用主、政策担当者など多く挙げられますが、そういった方々を巻き込んだ上で学習成果について議論して、再設定を繰り返すのです。

不断の協議と議論を繰り返した結果として学習成果が定まってきたのであれば、実際にそれに基づいた学位プログラムがあるべきですから、学位プログラムの再設計、改善に取り組むという流れになります。

チューニングの先行事例としては、人文社会学の分野ではやはりマッキナーニ先生が主導されていた歴史学分野におけるチューニングに注目すべきです。米国でのチューニングは複数の分野で民間財団の支援を得ながら、社会にその学問固有の意義を伝えていこうという形で始まりました。

歴史学分野のチューニングは、当初から学生や卒業生あるいは大学の執行部あるいは保護者や雇用主、政策立案者を巻き込む形で始まっています。哲学教育の意義を考えるとすると、どうしても哲学教育に直接関わる人々の中だけで議論する傾向があると思いますが、重要なのは多様なステークホルダーを巻き込んでいくことだと思います。哲学教育の意義を様々な人に伝えるのは困難です。しかし、我々は自分たちの言葉を誰にでも通じるよう可能な限り通約的に提示していかなければいけません。

では歴史学分野ではどのような学習成果を定めたかと言いますと——実際にはさらに細分化した形でも定められていますが——主に三つのことが挙げられます。一つは歴史的な範疇にある情報についての歴史学的知識。これは専門知識ですね。二番目は、過去の過去性を認識し、過去の出来事の複雑な本性を明らかにし、また、過去の記録が複雑で問題含みであることを知る歴史学的考察力。第三に、汎用的技能を歴史学的な文脈に置き換えたものもあります。注目すべきは、大部分が歴史学を学んだ学生特有のコンピテンスを明文化している点です。汎用的な能力に関するものなど、一般の人から見てわかりやすいコンピテンスも挙げられておりますが、根本としては、歴史学分野こそが独自に育てられる力を定めています。

こうした活動の成果を物語るものとして次のようなエピソードがあります。あるユタ州議会の議員が、人文社会学系の学位は何の役にも立たないと言ったときに、保護者から雇用主にいたるまで非常に多くのユタ州の人々からの異論・反論があったそうです。こうした反応の一因として、マッキナーニ先生たちがチューニングを通じてユタ州の人々に人文社会系学問の教育成果や意義を伝えたことが挙げられます。その後、チューニングの取り組みはユタ州立大学のみならず、全米歴史学会を通じて全米的に波及しました。

ここで、なぜ私が日本の哲学分野においてチューニングを進めるべきかと考えているかを述

べます。まず、スライドには卒業生たちのキャリアパスの狭まりと書きましたが、渡邊さんのお話にもありましたけれども、哲学の学生がどのようなキャリアに向いているのか、そして哲学を学んだ学生が自信を持って活躍できる分野とは何か、なかなか見えてこないという現状があります。

次に、学士力の概念が浸透したことによって汎用的な能力の過度の強調が行われている状況に私は強い疑念を持っています。クリティカルシンキングやキャリア科目など、多くの大学で汎用的な能力を育成することを謳った科目を開設しており、我々哲学系の教員はこうした科目を担当する受け皿になりつつあります。しかし、私は哲学を学ぶことでこそ身に付く能力がたしかにあり、それはキャリア科目などに劣らず重要だと思っております。

またこれに関連しますが、これまで哲学の専門家たちは自分たちの教育の学習成果を十全に示してこなかったと、自戒を込めて思います。だからこそ、哲学の学生のキャリアパスは狭まり、哲学の科目も減ってきているのではないか。私は哲学の学習成果を社会に対して通約的、コメンシュラブル (Commensurable) に提示する必要があると考えております。これまで言語化できていなかった哲学特有の学習成果を言わば再発見する必要があるのです。

以上のような問題・課題に取り組むために、私はチューニングという枠組みは非常に便利であると考えております。

アメリカでは政策的に哲学の学習成果を定めようという動きがありましたが、それに対してかつて全米哲学会は猛反発しました。理由は、「哲学教育の学習成果は明確に言語化できず、むしろその言語化できないところを大切にしている」、あるいは「学習成果を定めることで哲学教育が膠着してしまう」などです。今でも反発を感じる教員は多いでしょうし、まだ学習成果を提示していない大学はたくさんあります。そういった状況で、公表を行っている大学の事例を見ていきますと、例えばスタンフォード大学は「口頭やライティングを通じて哲学の概念を伝えることができる」、他にも「緻密な読解」あるいは「批判的思考」など汎用的技能に関連した能力に言及しています。

同様に次のアリゾナ大学は、汎用的技能と哲学研究に関連した技能が言及されています。しかし哲学の学習成果は何かと問われた際に、「哲学のテキストを分析できる」とか「哲学の論文を書ける」と言っても、ほとんど「哲学研究ができるようになる」と述べているに過ぎません。なぜ大学で哲学を学ぶ必要があるのかという疑問を持つ人々に対して、説得的な説明したことはないのです。

こうした学習成果の設定が行われてしまうのは、アリバイ工物的に怠惰な仕方で作られた可

能性も否定できませんが、やはり全米哲学学会が哲学の学習成果を定めることに対して反発していたように、高等教育や産業社会におもねるよりは、哲学は哲学のやり方で行くんだというプロテストがあるように私には感じます。

一方で、小規模大学は参考になるような学習成果を定めております。そのうちの一つ、このセント・ベネディクトカレッジとセント・ジョーンズカレッジは、注目に値します。私が感銘を受けたのは、チャリタブル・リーディングという概念です。チャリタブル・リーディングというのは、これだけではなかなか通じにくいのですが、我々哲学者がテキストを読むときに大事にしている姿勢です。

よくテキストを批判的に読むと言いますが、まさに批判をするために読むわけではありません。そうではなくて、相手の欠点があったらその欠点を補ってあげる。長所があったらその長所を伸ばすような形で読んであげる。相手の議論がより完全なものになるように、サポートするように読むというのがチャリタブル・リーディングです。学生時代、私が自分の議論に都合が良いように対立論者を批判して斥^{しりぞ}けると、先輩たちから「それはチャリティがないね」と言われたものです。自分の議論を展開するために、他人の議論の小さな欠点を批判して引用することは不誠実な姿勢であると哲学の研究者は考えるのです。このチャリタブル・リーディングは哲学の学生が身に付けるべき重要な能力の一つだと思いますが、これまであまり言語化されてこなかったかと思います。このチャリタブル・リーディングに類するような、我々哲学の研究者が重要視してきたにもかかわらずあまり言語化されていなかった事柄を、これからはどんどん掘り起こし、それをわかりやすく社会に伝えていくことが重要だと私は考えます。哲学研究者のみならず様々なステークホルダーを巻き込みながら学習成果を再発見し、哲学教育の意義というものを伝えていくのが我々の課題ではないかと考えます。

最後に、御覧のように今後の課題を書かせていただきました。これはすなわち私がやりたいことですが、まずは「哲学分野の参照基準」のような先行事例も踏まえ、哲学の学習成果の再設定をしたい。また、哲学専攻学生のキャリアパスの明らかにする。他方、学習成果を定めた以上はアセスメントをしなければいけません。その方法の共有や実施もしていきたいと思えます。そして最終的には、学習成果にもとづいた学位プログラムの再編につながらなければならないと私は考えております。

本当にそんなことが、私みたいな一介の教員にできるのかと皆さまは思われるかもしれませんが、ですが私はこのようなロードマップを考えていて、実行できると信じているのです。どうやってできるのか。これはいろいろ個人的な事情もありますけれども、今、仲間に学習成果を

一緒に決めていこうとたくさん声をかけています。そして実際、来年度の後期からは、そういった仲間が担当している大学での講義でデータを取っていこうと話しております。そうしたデータの分析結果は今回設立した哲学教育研究会などの場を通じてどんどんオープンにして、フィードバックを得続けたいと思います。

最終的な学位プログラムの再編と書きましたが、それは一人の教員ではどうにもならないことです。私は来年度から新しい大学に所属する予定ですが、他の先生方と協力して多くの人間に納得してもらい形で学位プログラムを改善し続けることができると考えております。少なくとも私が学習成果にもとづいてしっかりと学位プログラムを再編することができれば、哲学分野におけるチューニングの事例として最小限の第一歩は踏み出したこととなります。そこまでは頑張れるのではないか、というロードマップを希望を持って描いております。

みなさまにも御指導、助言をいただけたら幸いです。ありがとうございました。（拍手）